

望ましい 猪猟犬の育て方

あるハンターの私見

神奈川県

田宮 治



小太郎号直子ジヨウ号(1歳)とラン号直子富士美号(10カ月)。今猟期が楽しみます

◎訓練の「さ」「ろ」「せ」

「つなびき」も終り、さていよいよ猟野にひきこむ実戦での訓練という事になる。

食事を通して教える、いわゆる「しつけ」や「つなびき」での「指示・伝達をきちつと覚えさせる」のが「基礎訓練」であるが、これは毎日続ける事さえ出来ればの話である。だれにでも簡単に仕上げる事が出来るものである。

しかし基礎訓練で忘れてならない事は「愛犬との信頼関係を築く」のが「基本」であるから「全ての事を自分の手でしてやる事」であり、「笑顔で話かけ」よほどの事がなにかぎり「おこらずほめてやり、全身をなでまわす事」。そんな事のくり返しこそが肝要である。私はここまでの訓練が猪猟の生涯を決定付ける一番大切な事だと思っている。「木」にたとえれば「根」の部分の完成である。がちりと大きく地についたものなればならない。どんな悪天候にも耐え忍び・うち勝つ様である。この「基礎」がきちつと出来ているかで見事な大樹になれるかが決まるのである。一般的に人は、こ

の地上の目に見えている部分の完成・つまり「幹をより大きく強くしたり」「見事な花や実をつける為の枝葉の形成」をもって、訓練と言う様である。

人それぞれで、考え方もいろいろとあろうけれど、実践してみた体験から言える事は、この「枝葉の訓練こそが名犬を作る為の仕上げの仕事」であり、並の覚悟や努力では決して出来る事ではない。さらに、その内容も実に「枝・葉」の様に多岐に渡るのであり、教えづらく、やりづらい事はかりなのである。

くり返しになるが、山びきまでの要点は猟野に放犬した愛犬を「きちつと見える範囲に置く事」にある。引きづながなくなっても、つなであやつられてはいるが如く「主人とのスタンスを上手にとれることが第一の条件」である。たえずくり返し主人との位置確認が出来た事(遠ばしりする様ではだめであり、さらにつなびきを重ねること)。

二つ目は声を出さなくても主人の口笛とか手をふる動作で「思う通りに動いてくれる信頼関係」と「逞しい体を作る事」である。

三つ目は猪との攻防にも打ち勝つ為の「強靱な気迫を教え込む事」にある。私はここまでが『訓練のいろは』であると思っているし、子犬から若犬においてはこれらの訓練で充分である。この「基礎訓練」を「生かして」山にひきさえすれば必ずや先行き楽しみな猪犬になるはずである。

◎「枝葉の訓練」 極めつけの一芸の完成

私があえて枝葉の訓練と言ったのは、あくまでも「基礎訓練」に對してである。重要と思うのでもう返りになるが「基礎訓練」はきちっと毎日やり続けられれば、必ず成果が出る。だれにでも出来る訓練であり、猪犬作りの基本である。これに對し「枝葉の訓練」は猪犬が極めなければならぬ最も大切な奥の深い「一流芸」を、体験を通して教えこむ事である。

こんな一流芸を「枝葉の芸」と言ったのは、その「一芸」が枝葉の如く実に多岐に渡る事と、どれ一つとって見ても教えづらく、一番むずかしい奥の深い「秘芸」である。「秘芸」や「きわめつけの芸」などと言うものは、実は「教えて

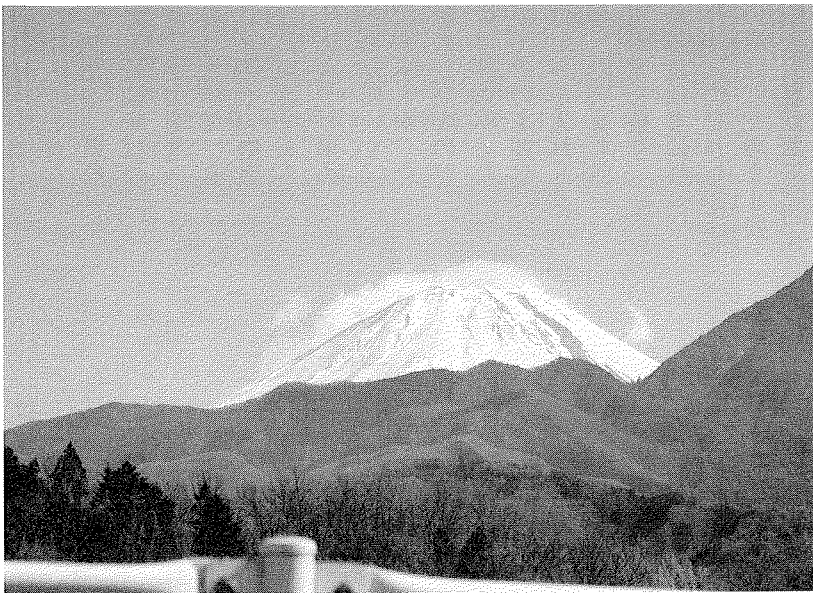
やれる芸域」をはるかに超えた「その犬の持つて生まれた天性の猟能による」ところが多く、そんな意味からも、主人たる獵人は、自信をもって自らの獵体験を、全て投入する覚悟で愛犬に向き合う事である。

当然の事、立派に育った枝葉に

は美しい花が咲くはずだし、見事な実も成ると言う事である。若犬が育つてゆく中で、成長する時々に必要な、適切な訓練が大切で、「今、愛犬にしてあげられる事は何か」をどんどん前面におし出し、自分に合う獵法で愛犬を仕上げる事なのだが、忘れて

はならない事は、あくまでも「天性の猟能を極限まで伸ばしてやる事」なのである。実戦の場でくり返しくり返し何度でも猪との攻防の中で体験を重ねさせてやる事に つきる。

実戦であるから当然の事、危険はつきものであるが、その事も含



山梨の獵場



田宮系子犬(この中から名犬が…)

め、あらゆる事を考えて犬の「闘争心」と「猟感を磨く事」に自らの体験を生かして使うのである。くどい様だが訓練所などではなく、猟野における野生猪との攻防であり、その場数をふませる事以外にないのである。

そしてきわめつけの場数とは、「猪を撃ち取ってやり」それを「思い切り咬ます事」が中心である。その事によって愛犬は、主人と共に「追う目的」(猪)を知り、「勝つ喜びを知る」。愛犬が「オヤジ、取れたぞ!!」「どうだ、俺の芸は:」出来る犬のその場の勇姿は、それはそれはだれの目にも見事なもので、苦労の花がパツと咲く「夢・なる・瞬間」である。

世に「絵に描いた様な:」と言う最高の褒め言葉がある様だが、猪との攻防で「一瞬にかける秘芸」や激戦の中で我が主人にだけに見せる「きわめつけの一芸」とか「命をかけた大技」などは正しく愛犬が猪犬として花開いた時であり「絵になる必殺の一芸」なのである。一芸完成の良薬は実戦を重ね、1頭でも多く猪を咬ます事にある。

◎「画竜点睛」名犬への道

さて、いよいよ仕上げと言う事になる。単独

の醍醐味は愛犬の芸できまるのであって、良くも悪くも猪猟は犬次第である。その昔、「梁の張僧ようという絵の名人が、金陵の安楽寺の壁に2匹の竜を描いてその1匹にひとみを入れると、たちまち雷電が壁を破り、その竜は雲に乗って天に登ったがひとみを入れないう竜は、そのまま残っていた」という故事である。

何事にもよらず考えも及ばない事をあたりまえの様にやっつけてのけるのが「名人」であらうけれど、「名人」とか「名犬」などと言うものは、望んで得られるものでも、鍛え抜けば出来ると言うものでもない。人であれ犬であれ頂点を極めるのは難しいことであり、並大抵の事ではない。名人や名犬にな



特訓中の若犬、アカ号(左)とヨシ号(右)10カ月
(すでに1軍なみの実力です)

れるのは、ごくひとにぎりの限られた逸材なのである。

そんな名人の手によってひとみを入れた1匹は、機を得て雷電をよび、雲にのって天まで登りつめるが、仕上げの一点、つまり名人の手訓練が及ばなかった1匹はそのままの状態に残っていたと言う事であり、「仕上げなければただの竜」。「犬」なのである。

「天性の素質ある逸材犬」を「毎日きちつと訓練する事」に加えて



ボス号と奈智号(ブル系で期待の若犬)

「すぐれた指導者のもと」でくり返し教えこむ中で「天運・奇跡」までもが味方して、はじめて登りつめ、頂点は極められるものだと思ふ。

それでは具体的にどうすればと言う事になるが、名犬への常道はないのであって、名犬の定義も含め人それぞれである。そんな事から猪猟の名犬と言っても仕上げる上で特別に異なる訓練など出来るはずもなく、あくまでも「子犬発



ケン号(田宮系を支える大切な子です)



ウルフ号(左)と種牝チヒロ号(右)



ダイ号(素材犬)

↓猪犬行き」の路線にのっとった訓練である。

猪犬はみな同じく実戦の場で仕上げとなるのであって立派な考えや理にかなった論法ではないにもプラスにならないのである。そこにあるのは真剣勝負の実戦でのみ鍛え磨かれるものであって、目的の猪を1頭でも多く撃ち取り、これを咬ませる事によって覚えさせ

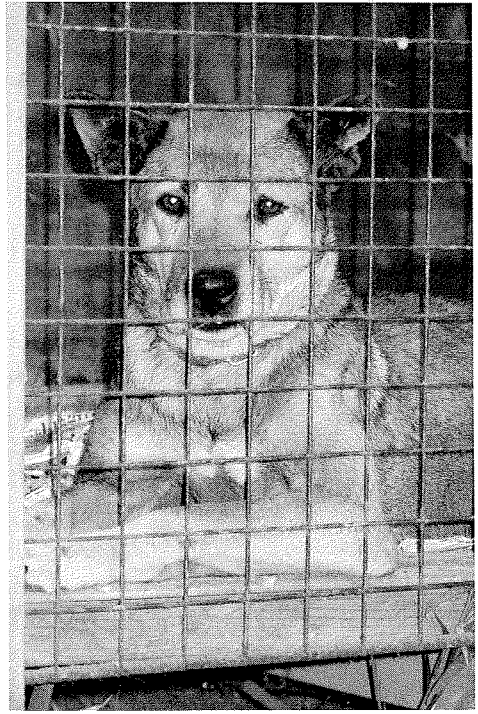
るのである。

極論を言ってしまう(本来、あまりこの様な事は言わないし成果主義は好きではないが)猪犬は「猪を咬んだ分だけ極めてゆくもの」で「追う事」も「鳴く事」も「攻防の方法」や「おこし」までもほとんどん上手になってゆくものである。その上、決して教えられない名犬なればこそ出来る芸、たとえ

ば「迎え芸」であるとか「猪のおびき出し芸」「極めつけの寝屋止め芸」とか息づまる激戦での「大猪の止め芸」なども、なんの事は無い、猟期に主人と猟をする実践の中で覚え育ってゆくのであり、数ある猪犬の中からだれ教える事なく「おや!」「なにをしようと言うのだろう!」と言う様な「新芸?」もやっつてのけるようになる。

この辺より先にどんどん分け入り、天性の猟態を発揮するのが名犬と言ふ事だと思ふ。

たとえ達人であつても教えづらく、覚えさせられない「鳴き芸」、たとえば「寝屋なき!!よせなき」なども「そんな鳴き声では猪は止まっていないぞ!!」「もっと区切りよく間をとつておちついて鳴きなさい」等や、「止め咬み」でも「咬



まだ元気で追い切るアニー号
(二代目アニー号)



堂々たる富士雄号

る事は愛心に通じるもので、名犬もまた惜しみなくつきこんだ「手間と愛心の芸術品」かも知れない。愛犬にしてやれることをきちつとやり通して、いけば、なかに案ずる事はない。愛犬もまた

んだら体を寄せろ」「それでない」と切られるぞ」など言ってみたところで、とても無理な話である。主人に言われる前に悟ってくれた様な秘芸をこなす。これらは全て素材犬で決まる芸域である。やるべき事をきちつとこなし、順調に育った若犬に、自分に合った猟法とか、こだわりの一芸をどの様に教えこみ完成させるか、つまり「画竜点睛」の「点の一字」に何を入れて総仕上げとするか、これまた意見の別れるところである。私はまよわず「愛」を入れる事で名犬としたい。獵人にとって名犬とは、夢でありロマンである。そしてそれは限りなく追い求め実

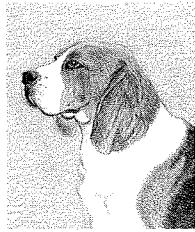
現するのであるから、獵人として愛犬に絶えずおくり続けなければならぬのは「愛」であり「エール」であると思う。どんな立派な事を並べ頑張ったところで、ただ一つ、「愛犬を可愛がって大切に育てる心」がなくてははじまらないのである。どんなに厳しい訓練にも耐え忍び、つらい猪との攻防を命をかけて戦い貫くのは愛犬が主人の愛を信じていればこそ出来る事なのである。そんな「愛心」を糧として、猪犬はそれを「ふみ台」にどんなに登りつめるのである。主人たるからには決してゆらぐ事のない強い信念をもって、実戦の獵場にめぐり

来るその時々チャンスを生かし、これを愛犬の「ふみ台」にどんなに差し出し元氣付ける事である。単独獵の要は犬であると言ってみても、その猪犬は当然の事、主人が作るものであって、どんな時でも実戦での「ボス」は自分なのである。荒猪にも勇敢に立ち向かって見せ、なにごとにも身をもって示す事を忘れてはならない。決して逃げ出したりしてはだめで、すばらしい獵人のすばらしいところをすばらしい愛犬に乗り移す心構えが大切であり、愛犬のもっている天性の獵能をいっばい磨き出す為、惜しみなく手間をかける事である。何事によらず手間をかけ

主人の苦勞をくみとるかの如く、教えづらい名犬への道は「ズバリ愛犬が自らきちつと答えを出してくれる」のである。どうしても教えられない芸域にどんなに割りこみ、天運・奇跡までもことごとく味方につけ登りつめるのは、実は訓練以前の交配でのみ可能な天性の獵能をもち合わせた素材が限りなく物を言うのである。だが、そんな素材犬であっても「つなぎっぱなし」であっては当然の事、だめである。大切なのは「努力に勝る天才なし」であり、どんなにすぐれた能力をもった犬でも、信じて磨き抜かない事には光る道理もないと言う事も確かである。

今月の表紙

ビーグル



イギリス原産のハウンドで、ウサギ専門犬である。イギリスからアメリカへ渡ったのは1870年頃といわれ、1888年には、すでに「ナショナル・ビーグル・クラブ」が、誕生している。

フランスには19世紀に入ってから移入されているが、原産国のイギリスでは近年、ビーグルにかわって、ビーグル・ハリア(ビーグル×モダン・ハリア)が好まれているようである。

さて、わが国へビーグルが渡来した記録では明治初年の頃とされている。当時はビーグルもバセット・ハウンドも混同されて使役、繁殖され、ビーグ

ルの雑種化がすすんだといわれる。

戦後は、ご承知のとおり、アメリカン・ビーグルが輸入され、わが国においてもウサギ猟犬としての首位の座を占めると同時に、昨今は、フィールド・トライアルも、各地でおこなわれている現況である。

その優れた嗅覚力、執拗な追跡力、音楽的な美声の追い鳴きなどは、定評のあるところであるが、サイズはFC I(国際畜犬連盟の公認標準)1972年1月1日付)によると、体構を33×41cmに統一され、体重は牡の標準で約17kg、雌はそれより軽いとされている。

そんな事からも、猟場における主人の言動は重要であり「やるべき事をきちっと教える」。あとは愛犬が自ら答えを出すのを気長に待つのである。咬み一番のヤンチャな若犬が、無事に3歳を過ぎ、猪との激戦をくぐり抜けて、5、6歳頃から見せつけるなんとも言えぬ絶妙な秘芸は、見る人を感動させ名犬をはたで感じるものである。子犬を育て、訓練し、猟野で守り通し、そして名犬への道を登りつめさせる事も含めて、我々猟

人に求められるのは、あくなき探究心と限りなく夢を追う姿である。子犬からの成長に合わせ、その時々適切な訓練をしてやる事が一番大切な事ではなかるうか。何事においても「こだわり」をもつて「なにがなんでも」とやり通す不屈の信念こそが物事を完成させるのであって、その喜びもまたそんな褒賞として味わたるのだと思うのである。

どんなに時代が変わろうと、とりまく環境が変化しても、自説の

基本と本来の猟常識は守らなければならぬ。思えば「名犬への道」などと、大それたお題目を唱えて見たものだが、実は、この事を常に子犬作りや訓練の目標にしている自分に対する励ましであり激励の様なものであったかも知れない。

「お、これはすごく良かった。まさしく名犬だ」など言ってみるところで所詮、実戦の場で評価するのは自身なのである。うぬぼれ

心も手伝ったひとくぎりの満足の様である。

猪犬育てに手応えを感じ、確信のもと嬉しき事に変わりはないが、これはあくまで子犬発↓名犬行きの狭間の出来事である。夢と現実の狭間にかかった七色の虹の様な存在であるが、こんな手応えを重ね、つなぎ合わせる事で、なんとか名犬への常道を編み出したいと思っている。そして後から来る猟人の為、道標を立て置きたいものである。

世界の<散弾銃>を
より深く知るために—

堀尾 茂 著
Brief Note on

ザンヨントガン

B5判 定価3,360円(税込) ¥340円

※送料加算の上、前金にて下記本社へ

発行(株)狩猟界社 電 03(3292)1211(代)

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-21

絶賛
発売中